

あを 4

2015



祖 母 山



須賀忠男

呼称 そぼさん

標高 1,756m

祖母山も傾山も夕立かな
日が落ちかかるその山は祖母山
祖母山・傾山日を没れ蒼い獣の目
祖母山のふところにして花万朶
祖母山は優しい風と郭公と

山口 青邨
種田山頭火
瀧 春樹
熊岡 俊子
須賀 敏子

あを

四月

水流る

佐藤 喜孝

東京

令法の芽紙のうすさに水流れ

針の孔くぐると膝下春の風

うすらひを境にしたるきのうけふ

猫の道雀のこみち日出草

鑄掛屋に道ながくあり春の蝶

夜あがりの道に梅の花どこか

山を出て海に出でたる春の道



朝起きるとまづパソコンの前に
坐る。一日一つ季語を増やす。その
季語の例句をあつめる。ネットの俳
誌のサロンに掲載した六万句の中か
ら抽出しホーム・ページに掲載する作
業である。その時「あを」の作品も
読むことになる。故人の作品になる
となつかしさもあつて目が止まる。
ときをり句を読んだのにお経を読ん
だ気持になる。お経といへばどこか
俳句と類似点があるやうにおもふ。
だういふ所かと質されると答に窮す
る。ただ意味も分らず有難くなる俳
句がある。「油屋にむかしの油買ひ
にゆく」「鶏頭の十四五本もありぬ
べし」「永き日のはとり柵を越え
にけり」などもの覚えの悪いわたし
でも頭に浮ぶ。あの古池の句にして
も摩訶不思議な雰囲気有してゐ
る。さがせばぞろぞろ出てきさうだ。

大犬座

大日向幸江

埼玉

春シャツの胸より取り出すマールボロ
川べりの小さき炎野焼せり
つくしん坊青い空へと大欠伸
なによりも負けん気強し枯蠟螂
オリオンの足元にあり大犬座
雛段に牛車のありて夜の早し
四丁目音なし黄砂に魘はるる

齊藤 裕子

東京

夫と競ひ子猫呼び込む掛布団
耳欹てまどろむ猫や春隣
腹の上子猫揺らして日向ぼこ
伸びしたまま寝入りし猫よ春隣
賑やかに拾ふ子もなし年の豆
二人して声は大きく年の豆
好物を並べ立つ夫日向ぼこ



二月末から、足場を組んで外壁塗装をやり始めた。期間は十日から二週間位。塗装は天気は左右され雨が降ると中止になるので、三月二十日に終了の予定。

足場を組んでネットをかけると防犯上物騒になる。以前、裏の家が足場を組んで工事をしていて、我が家に空き巣が入り大騒動した事があった。最近も近所に空き巣が入ったという警察の立て看板が立った。する。我が家で足場を組み始めてすぐ、奇妙な電話が三回もあった。電話の音に急いで受話器を取り、「斉藤です。」と名乗ると、何も言わずにすぐ切れるのだ。そんな訳で、今は工事が休みの時も家を留守にしないようにしている。主人と交代で外出するようにしており、少々ストレスが溜まり始めている。

☆

佐藤 恭子

東京

牡丹雪の綺麗に見えし人遠し
甜酒はふたりに限る初日の出
待ちかねし下り諸白三日かな
仄暮れし微かながる香は水仙
立春やポストの背より少しだけ
春眠の真中にみつづけし左脳
春の日の蟻の早出やナフタリン

☆

篠田 純子

東京

電燈のやさしきひかり古ひいな
一族の集合写真風ひかる
学ランに赤いマフラー二重巻き
水琴窟にしゃがみ余寒の膝頭
梅越しに軋む電車を見霽かす
埋めたての歴青に湯気雲道
仕事の愚痴を洩らしゐる夫雨水の夜

中野の警察学校の跡地に二つの大学と区民が憩えるようにとの思いからか公園ができた。近くには野方警察署、病院、体育館、区役所、サンプラザなどがある。

去年の暑い時は、水着の子供達がプールでない水遊びができる公園にきて、本当に嬉しそうに遊びまわっていた。こんなに駅に近いところにと最初は戸惑った。がどこからも出掛けて来れるので遠くに出かけられない人にはラッキー。今年も孫達は頻繁にくるのだろうと想像がつく。子供の騒いでいる声を聞きながら、ベンチで寛いでいるのはいいものだ。

公園の名前は四季の森公園である。春夏秋冬の顔をなかなか見比べられないが、気にしてみよう。

二月二十八日、あを吟行で川崎市の古民家園を見学した。参加者は五名と、こじんまりしていた。

私は先ず入口近くの資料室で、ビデオを二本見てから古民家へ。囲炉裏で虫だしをするためにまきを焚いている匂いに、新潟の母の実家の記憶が蘇った。何度か冬の新潟を訪れたが、雪国での生活は東京で生まれ育った軟弱な私には出来る筈は無いと子供の時から認識していた。新潟生まれの両親から、豪雪で家の中の暗いこと、保存食のみの冬季の食生活。雪降ろしの重労働、春を待つ心等の話をよく聞かされていた。

昼食は、白川郷の合掌造りの中にある蕎麦屋でとろろ蕎麦をいただく、野外の木の卓での句会も、良い風情で、楽しい一日を過ごした。

家 普 請

定 梶 じょう
石 川

何もかも竿のものさへ枯れつくし

屋根雪の迫り出してゐるオリオン座

日脚伸び舟を揚げるはペンキ塗る

神棚のおふだの白さ建国日

停留所永く待たされ麦芽ぶく

長ぐつ色のいろいろ雪解かな

家普請の瓦載るより春驟雨

春きざす

須 賀 敏 子
埼 玉

金柑はひよの意のまま冬麗

図書館へ急ぐ土曜日落椿

崖氷柱電車とバスを乗り継いで

春の雨衝いて集ひし古希の顔

「みちのくの仏像」上野春きざす

富士きりり十国峠春立てり

伊予蜜柑届けば夫の顔緩む

五〇歳過ぎて私は大阪に住んだのだが、初めての関西圏住まいに幾つかの文明的衝撃を受けたのだった。当然ながら言葉もその一つ。

参加した句会。拙句の「倦きず」の措辞を「倦かず」だと、異口同音にいうわけだ。私は、文語的には「倦かず」だろうが「倦きず」と遣つても誤りではあるまい、と。

後で調べたら、関西以西では昔から現在に至つて「倦かぬ・倦きて・倦く時」と遣い、「倦きない・倦きて・倦きる時」と遣うのは近世の江戸語以降である、と説明されている。

してみれば、否定の「ない」は東京語であり、「ず」は一般的には関西弁だから、「倦きず」の措辞には東京弁と関西弁の混乱がある。

納得したのだった。



☆

竹内弘子

埼玉

春寒や箸に辿れる被災地図

母看取らざりし日に似て風花す

砲台に雨小止みなき桜かな

門限をまもらぬままに卒業す

佐保姫の蓬髪めける魚網干す

荻窪の沼の主なる烏貝

沼底に嘯きをらむ烏貝春遅し

☆

田中藤穂

東京

春寒の風に触れゐる窓硝子

詩集予約店を出づれば雪の舞ふ

紅梅のこぼれてをりぬ閻魔堂

顔知らぬ人へ書く文春の雪

窓明り春めきて影うごくかな

囀りへ繕ひ物を拵げたり

老年の不確かな耳猫柳



日曜日テレビのチャンネルを回したら東京マラソンをやっていた。物凄く数の人が思い思いの服装で走っている。

エチオピアやケニアの選手は何故あんなに速いのだろう。でもこれは競技ではなくお祭らしい。引退した元オリンピック選手も子供に自分の頑張る姿を見せたいと参加しているし、かと思つと九十才のお爺さんが娘と孫に左右を守られながら走ったり、新橋の芸者さんも身体を鍛えないとお座敷がつとまらないと和服をスポーツウエアに変えて走る。ボクシングの内藤大助選手もいた。走るのでも駅伝とマラソンは全然違うのだとか。私は炬燵に入ったまま、とうとう終わるまで観てしまった。

走者の方々も警戒のお巡りさんも道路も、お疲れ様！

自家菜園

長崎桂子

三重

早春のカレンダーに行事の丸
春日差自家菜園へいそいそと
耕すや自家菜園に一輪車
公園の野茨の芽にべそかく児
野茨の芽吹く頃合歩のすすむ
余寒なほ明けたれば真白の視野
種袋マンガ本のごと積まれをり

二月

森理和

東京

野良二匹寄り添ひ北風を遣り過す
生垣のわさわさ揺るる北風
特産の蜜柑を餌に養鶏場
サボテンの花つぎつぎと二月過ぐ
番屋にてもとめし菜の花伊豆の塩
底冷のその日葡萄の枝おろす
出産日早まり二月に子の生まる

一月に二輪咲いた寒あやめが萎んで四・五日したら、今度は四輪も開花した。

花は最初よりやや小さめだが、色はうす紫より、桔梗色に近い色で、しかも鮮明さがあり、こんもりとした葉の中にくっきりと咲いている。

そしてよく見たら、蕾がまだ二輪あり、後暫くは花と香りが楽しめる、心嬉しくなりました。

でも十月に埋めた日本水仙の球根は、何十本も葉は伸びて来たのですが未だ花は付けていません。失敗でした。



☆

山莊慶子

埼玉

枇杷の花身近になりし戦かな

剪り過ぎと嘆きをりしに冬芽つく

残る日に思ひを馳せて根深汁

待春やピンクのセーター出してをり

バレンタイン老牧師にもチョコレート

夜の深けて雨音激し返り寒

朝がすみ群れ居る鳥の煌めける

川崎市立日本民家園 赤座典子

東京

春浅し荒物屋の軒竿揺るる

春の雪駅毎に屋根白くなる

受験生屈託無げにさざめきて

春昼や難聴ですの札と乗る

鬼の貌忘れてをりぬ春の旅

春の園ストレッチする団子売

手斧目の黒き柱に遅日かな水辺にて



二月の吟行は川崎の日本民家園であつた。園の紹介には古民家を将来に残すことを目的に一九六七年に開園の野外博物館とある。

各地から移築された水車小屋、石置き、板葺屋根の旧薬屋等種々あるが、各地方の住宅にも、それぞれに特色があり、とても興味深いものであつた。

二十種以上あるなかで、越中五箇山からの「旧山田家住宅」は、室内まで見学できる日であつた。以前五箇山を訪れていたので懐かしく、ボランティアガイドの方に色々と説明して頂いた。

合掌造りの筋かいには、三桎の枝が使われているので緩む事が無いなど珍しい話であつた。

園内での昼食・句会とで時を使い、園の後半は見学にも行かず仕舞いであつた（しっかり見て廻った人もいたようだ）。

それもこれも、麗かな日和と、参加者が五名という構成だったのが、至極のんびりとした吟行になったのかもしれない。ともあれ、疲れず楽しい一日であつた。

水辺にて

秋川

泉
埵玉

かまびすし鴨重なりて餌を漁り

かいつぶり潜っては浮きまた潜る

真鴨みてどちらの顔も皆同じ

葭鴨は風格ありのナポレオン

はぐれ鴨岸边にぼつり動きなし

葦の沼力たくはへ鴨眠る

朝の沼草萌え初めし音もせず

☆

井上石動

山梨

白雲や何かと言ふうちに春

うぐひすの初音やザツク洗ふ時

啓蟄やうごめく古語の活用形

いづ方へ失する眼鏡よ春の宵

軽く噛む眼鏡のツルや雛用意

春はあけぼのたそがれは吾のもの

あたたかき雨つぶ載する梅花かな

平成二十七年乙未の新年から末席に加えて頂きました秋川泉です。

俳句はヨチヨチ歩きで何も分からぬまま伺いました。皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。

雛の節句も過ぎ春めいてまいりました今、花々の便りが聞かれます。そこに鴨の句ですが、何分私がおぼつかない足取り故、此の度は鴨の句をお許し下さいますよう。

野鳥観察の方も、野鳥見分けはボチボチの私です。

ところで只今の私は、「シメ」という鳥が、どうしても『朝青龍』に似ていてならないのです。あの可愛くないふてぶてしい横綱でした。あの頃も今も、好みでない朝青龍が気になって、その態度も姿も似ている自宅に来たノラ猫に『朝青龍』と云ふ名前をつけました。

花の季節。10年前山獲りの馬酔木は、もう咲き始めた。そして大伯星女を思う。9年前、山の入夫の時、情無し仲間が掘ったものを貰ったのが「えびね」。絶滅危惧種。これが何と翌年から、ベランダで咲いてくれていた。手はかけなかったが、鉢を置く場所が彼女(?)に合っていたのだらう。昨年植替をしたら花芽生まれず。今年5月の初旬が待ち遠しい。そろそろ隣山の、私だけが知る堅香子、も咲きます。神経を遣いながらの探訪の時期到来。そして家持を思う。二十年前、近所の祭で買った鉢植の藤。数年咲いてくれ、その後まったく咲かずの哀しき経歴の主。が去年、何を思ったのか開花。さて今年や如何?「草臥れて宿借る頃や藤の花」。私の大好きな明日香での翁句。明日香の畠はもうすぐレンゲの季節。風が、私にとっては、都を遠みいたづらに吹き始める。

☆

王

愛知 岩

美しき小雨の色や嬌柳

仰ぎ見し大仏の上春の月

誉れある安倍寛の遺志花吹雪

流れ落つ養老の滝暮れ遅し

自転車で微風を漕ぐ花吹雪

耕すや五風十雨の空模様

春の雪うつすら粧ふ金閣寺

年年歳歳花相似
歳歳年年人不同

唐の詩人劉希夷『代悲白頭翁』に出典した詩句である。勿論この「花」は広く花の全般を指す。日本語で花と言えば、春の日本列島を彩る桜の謂である。今年も桜の咲き合う季節が近づき、何となく気持ちが浮き浮きする。私にとっては二十二年目の花見になる。一年ほど留学するつもりで来日したが、図らずも二十年以上滞在し、感無量である。日本にとっては戦後七十年目の花便りになり、様々な思いでこの桜を見る人々がいるだろう。「散る桜残る桜も散る桜」という古句があり、戦時中、特攻などに散った若者も愛誦していたとのこと。嗚呼、桜哉！平和に恵まれた今日の我々がどれだけ幸せだなとつくづく感ぜられずにはいられない。

桜は一齐に咲く時も、はらはらと散る時も、どっちでも美しい。桜が大好きである。

客の身は花に浮かれて忘れけり

あをきーワード俳句辞典(けしーけつ)

化粧

化粧して家を出つると春の雨

日髪結ふ化粧簾れの水中花

春浅し白き化粧の道祖神

寝化粧は縁なきものぞ石路咲けり

化粧塩気高き面を秋の鮎

化粧せり老の初春迎ふべく

化身

古堀の化身の紋白蝶ふたつ

化身めく白一色の曼珠沙華

消す

秋思ふ波のかき消す砂の文字

ライト消し見あげる空の銀河澄む

うかつにも消せぬひと言曼珠沙華

消せる灯をすべて消したる秋の月

灯を消せば蜜柑が匂ふ妻の髪

花万朶年は消すもの取らぬもの

松村美智子

篠田 純子

須賀 敏子

吉弘 恭子

森 理和

竹内 弘子

竹内 弘子

赤座 典子

鈴木多枝子

吉成美代子

芝宮須磨子

森 理和

渡邊 友七

堀内 一郎

薊の世のテレビで怒る人を消す

金魚にも夜の挨拶ライト消す

新緑や消すことも絵を描くこと

線で消す電話番号鳥雲に

夏の灯を消しひと筋の風とある

開き切り蕊の色消す濃紅梅

灯消し湯に浴するや鉦叩

消し忘れたるかにひとつ冬鳥賊火

懸想

時雨るるや竜飛崎から懸想文

桁

いとこ会昭和ひと桁祭唄

血圧

朝ぐもり手首で測る血圧計

冬温し机の上の血圧計

冬に入るいつもの場所に血圧計

血圧を下げるうぐひす鎌倉山

冬に入る血圧計の数値かな

佐藤 喜孝

早崎 泰江

東 亜 未

田中 藤穂

篠田 純子

赤座 典子

長崎 桂子

定梶じょう

吉弘 恭子

鎌倉喜久恵

竹内 弘子

山莊 慶子

鈴木多枝子

篠田 純子

定梶じょう

臥してるか立ってゐるのか秋のくれ	佐藤喜孝
南山に馬放ちたる日永かな	王 岩
手を引いてくれる猫居り恵方道	大日向幸江
黒豆も上手に煮えて除夜の鐘	斉藤裕子
跼まる草見る背の冬日かな	佐藤恭子
孫七人曾孫八人賀春かな	芝宮須磨子
亀と鯉行き交ふ池に梅薫る	篠田純子
影のあることをたふとび日向ぼこ	定梶じょう
カーナビに逆らってゐる冬の旅	須賀敏子



幹の憂さひり出す棕櫚の花咲けり	竹内弘子
雨戸開け冬残月が目の前に	田中藤穂
荒海を楽ししみ浮ぶ冬鷗	長崎桂子
とける日も溶けぬ日もあり薄氷	森 理和
風花や励すことの難しき	山莊慶子
祖母という役有難し寒玉子	赤座典子
昨夜の雪熄みて下界の灯かな	井上石動
息白し犬と猫鼻つき合うて	佐藤恭子

喜孝抄



三月作品より

齊藤裕子・佐藤喜孝

踏切のなかで仰げり冬なかば

佐藤喜孝

踏切で立ち止まる人はいないから、作者は踏切を渡りながら空を仰いだのでしょうか。そのわずかな時間の中で仰いだ空を見ながら、冬も半ばまできた、よし後もう少しだと感じている。そして仰いだ視線を前方に移して残りの踏切を一気に渡って行く。そんな作者の姿が浮かんできます。気持ちにゆとりがないと踏切のなかで空を仰いだりできないなあと思います。「冬なかば」という季語が、踏切という区切られた空間の長さと呼応しているようで面白いと思いました。(裕子)

故郷へ我が無事告げてつばくらめ

王 岩

インターネットの普及により、世界中大概の場所と瞬時に連絡を取り合える便利な時代になった。十年程前三男が中国北京に留学した時、メールやスカイプで息子の状況を確認し不安な気持ちを和らげたものだ。しかしいくら連絡は取り合えても、中国と日本の物理的距離は縮まるものではない。その年初めて主人と二人で息子の住む北京へと向かった時、飛行機で四時間半位かかったと思うが、北京は私にはとてつもなく遠くに思えた。燕ほどの位かかって飛んでいくのだろうか。作者が遠く離れた故郷の地や、故郷の家族や人々に寄せる思いが、自由に飛んでいく「つばくらめ」に託す事で、切ない程に伝わってくる句だと思いました。(裕子)

孫七人曾孫八人賀春かな

芝宮須磨子

お子さんやお孫さんから届いた年賀状にそれぞれのご家族の写真が載っている。数えてみると須磨子さんのお孫さんは七人、曾孫さんは八人になった。何と幸せな事でしょう。きっと賀状だけでなく、お孫さんや曾孫さん達が次々いらして、須磨子さんは皆さんと一緒に賑やかなお正月を過ごされたのでしょう。(裕子)

鉛筆を舐める癖あり卒業す

篠田純子

純子さんの句はいつもユニークだ。この句を読んで子供の頃を思い出すと、確かに確かにと思いが当たる事がある。私は鉛筆の頭を咬む癖があった。筆入れの中の鉛筆の頭にはどれも歯の痕がついていた。鉛筆を咬む癖は考えがまとまらず時間を持て余している感じだが、舐める癖

影のあることをたふとび日向ぼこ

定梶じょう

の人は舐めては素早く鉛筆を走らせるイメージがある。そんな癖をご自分が卒業したとも読めるのですが、そんな癖のあったお子さん或はお孫さんがとうとう卒業だという、感慨の句だと思いました。(裕子)

日向ぼこというと、日溜まりや暖かい日の光のように明るい方にだけ目を向けてしまうが、作者はその対極にある影に目を向けた。確かに日向ぼこしている人の後ろには影ができているだろうし、影が濃いということはそれだけお日様の光も強く、日向ぼこの恩恵も大きいと思える。影ができる程の日の光があることのありがたさ。句を詠む時、いつもと違う視点から見つめてみることを教えられました。深読みすると、自分がまだ日向ぼこして影ができる物的な実体

であることへのありがたさをも感じます。(裕子)

潮さめの規則ただしき初み空

定梶じょう

年頭「書初のやうに一句をつくりたる 喜孝」といふ句を作った。だがつくった本人どんな句が書初のかなのか判然とはしなかった。この句を読んで書初のかな句だなあと頷いた。「規則ただしき」に背筋をただす思ひがした。楷書の句とでもいふのであらうか。(喜孝)

幹の憂さひり出す棕櫚の花咲けり

竹内弘子

“ひり出す”に圧倒される。あの黄色いもりもりとした棕櫚の花のボリュームにも圧倒される。幹の憂さとも云へるが、棕櫚の木そのものの憂さである。そしてお決りの作者の憂さでもある。といふよりも句中の“ひり出す”一語を味はってゐるわたしである。「すでにして御芋

のこの世ならぬ軽さ」の御芋は芋殻の間違へ。責は編集人、寛恕を。この句の“すでにして”も“この世ならぬ軽さ”も言葉のエネルギーを遺憾なく發揮されてゐる。

雨戸開け冬残月が目の前に

田中藤穂

月に関心を持つ幼児がゐる。夜空に見つけると片言で指さしをし喜んでゐる。わたしも夜中に目が覚めると窓を開け電線の絡まった空に月を探す。星は余程明るい星でないと無理である。掲句は雨戸を開けるのであるから、夜中ではない。もちろん残月、有明の月のことであるから夜明け方である。雨戸を開けたその時に、思はぬ方向、思はぬ高さ、思はぬ大いさに驚かれた。月に人類が足跡を残し、望遠鏡などで具に見ることが出来てもまだ月は詩歌の対象になつてゐる。後世の人は、月がみにくい人類の覇権争ひ

に巻込まれた時、だういふところ持ちで眺めることであらうか。(喜孝)

とける日も溶けぬ日もあり薄氷

森理和

スポーツをする前に準備体操をする。俳句を作る前も脳の準備体操が必要かも知れぬ。わたし、ちかごろは虚子の俳句を先づ読んでからにしてゐる。読耽らないやう数句読んで老脳を鞭打つてゐる。虚子は押付けがましい句は作らない。掲句も同じく押しつけてこない。毎日目にする庭の薄氷の様子を淡々と叙してゐる。人生と関わりなく薄氷といふ自然現象は溶けてはまた張ることを繰返す。「薄氷の解けゆくやうな別れかな」といふ句をみかけたが

人生に重ねる詠み方を取る必要がない。「とける日も溶けぬ日もあり」は読者にとり十二分に人の世のことである。(喜孝)

風花や励すことの難しき

山莊慶子

「励すことの難しき」はまさにその通りだと思ふ。ひところ流行つた「同情するなら金をくれ!」といふテレビドラマの台詞があつた。これで片付くことは百もあることを知つてゐる。しかしそれでは片付かぬ事もある。励ましても空回りしたり、逆作用をすることもある。まさに“難しき”である。慶子さんも体験されたことなのであらう。「風花」といふ濡れるでもなし、積るでもないはかない天象は作者の心情に寄添つて舞つてゐる。(喜孝)



こだま 二月号

かもしかの瞳に雪の降りしきる

松林 尚志

末黒野 三月号

年迎ふ洗ひ晒を身にまとひ
クリスマスはわが誕生日八十五小川 玉泉
松本三千夫

瓊 三月号

雪明り池の返照抱く阿弥陀
春着の子笑顔のままに寝入たる塩路 隆子
小西 和子

沖 三月号

振り代のある花種の袋かな

能村 研三

峰 三月号

水温む原発汚染水までも

布川 直幸

春燈 三月号

松のこゑ風の声聴く三日かな

安立 公彦

万象 三月号

銭湯のけむりや冬の日本晴
冬の蚊の埃のごとく下りてきし大坪 景章
三屋 英俊

ろんど 三月号

仏壇に外つ国の石開戦日

すずき巴里

遠浅のやうなる二度寝貝風鈴

田中 貞雄

唾蟬のひたすら上下左右の歩

々 々

馬酔木 三月号

路の臺濡れたるままに届きけり

徳田千鶴子

朝 三月号

顔振つて童女駆けゆく櫻ごち

岡本 眸

六花 三月号

鯉飼はれ氷らぬ水の寒からむ

山田 六甲

馬酔木 四月号

雨もまた愉しかりけり春くれば
春うらら翁媼の指相撲徳田千鶴子
水原 春郎

瓊 四月号

源氏車といふ名を負うて寒椿

塩路 隆子

春昼を夢かとはかり逝きにけり

朝妻 力

峰 四月号

ぼちと貼る二門切手や万愚節

布川 直幸

槐 四月号

冬萌や末代までの放射能

高橋 将夫

臨界を超えんばかりの寒夕焼

々 々

こだま 三月号

梅遠近日々変哲もなく過ぎて

松林 尚志

集 四月号

渡り来し鳥の白さや干潟風

大山 夏子

丈高き風を捉えて竹の秋

若泉 真樹

萱 四月号

雪風や素手にひりつく酒の瓶

木村 嘉男

大津絵を見るに頼杖小正月

亀田虎童子



鴨 三月号

冬霞便りなければ便りせり
極寒の訃報を深く諾へり

井上 信子

桑枯るる一本道の日差しなり

々 々

向き直りまた向き直り春の禽

々 々

洩さうな雨の浸みぬる落葉かな

高橋 道子

瓊 春号

メトロノームカチカチ冬の空真青
さてこの二股人参どこから切るはしもと風里
火箱 ひろ

萱 三月号

煤払木彫りの熊もその一つ
冬至風呂今も百まで数へけり亀田虎童子
小島 良子

霽 三月号

一山紅葉善男善女放し飼ひ

松林 尚志

京鹿子 三月号

大寒や等間隔に幹太し

豊田 都峰

ふたたび払ふくぼみの雪ばんば

々 々

風土 三月号

川一つとんで翁に御慶かな

神蔵 器

やぶれ傘 八十二号

冬菊の燃えかすとして少し茎

大崎 紀夫

魚屋がきてをり山に雪は降り

々 々

小島 良子

々 々

床下に空瓶のある寒さかな
飛石の地に沈みをり春隣

毎月25日発売 定価1200円(税込)

俳句界

2015年5月号

〈特集〉俳句協会推薦！
後世に伝えたい名講演
現代俳句協会、国際俳句交流協会などで開催された、歴史に残る名講演（抄出）を掲載！

タラシイ 俳句界NOW いさ桜子

特別作品50句 長谷川 權

特別作品21句 山崎ひさを 水田光雄

特別座談会 俳句の未来
結社の高齢化と後継者不在を考える
協会や結社は何かアクションを起こさなくてはいいの？

稲畑汀子×豊田都峰×姜 琪東
「ホトトギス」名譽主宰 「京鹿子」主宰
●お邪魔します 書齋訪問 大坪景章「万象」
★セレクトシヨウ結社「六曜」出口善子

他 名村早智子「玉梓」

対談 意地の餅人 文挾夫佐恵
鎌田 慧（ルポライター）
佐高信の甘口でコンニチハ！

別冊 投稿俳句界 一流選者20名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文藝の森

お求めは・・・〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳境流連

子の髪の強く堅しや柳絮とぶ

幸江

(一九九六年五月)

五月のある日、水辺の公園を歩いた。そこは薔薇で有名な公園だ。小川に添いゆつくりと歩く。家鴨が私の後を追って来る。久しぶりの場所に私の足は軽く今まで見たことのない景色が広がっている。誰もいない水辺に、それはそれは大きな柳が一本聳えていた。その木からは折からの風に白くモヤモヤとした綿のような生き物じみたものが飛んでいる。やがて私の周りが雲の世界に変った。弱い風の中モヤモヤが踊っている。その時足元で家鴨が鳴き始めた。私の回りの雲が風に流されて行く。大きな柳がゆつくりと揺っている。そうなのね、これは柳の木が子供を旅立たせる親心だったのね。遠くへ旅立つ吾子

やうな時に村人へ向けて呟いた一句ならなほ面白いのに。

亀鳴くの典拠とされる「川越^{ごし}のをちの田中の夕闇に何ぞと聞けば亀のなくなり」の亀鳴くと答へたのは村人のやうだ。他にも田螺・螻蛄・蚯蚓と思ひついただけでも鳴きさうもないものが句上ではよく鳴く。亀に鳴く器官はないと云ふが、シグナル音を出すことを鳴くといふならば亀は立派に鳴く。

夏の星弥かがやくや苗圃ふ

桂子

(二〇一〇年七月)

ピーマンか枝豆か、どちらであつたか覚えていませんが苗を買って来て植えた。翌日か翌翌日であつたと思います。其の日は昼すぎからやや風が出て来て、なんとなく肌寒いと感じた夜でした。此の夜の星は、此の上もなく美しくかがやいていました。そして此の冷込みは多分苗を駄目にしてしまう。

に別れを伝えていたんだね。柳絮はもう私の回りにはいなかった。

人には告げず眼前の龜鳴いてをり 喜孝

鳴くときは甲羅を脱げよ春の龜

首伸べて上手に龜は鳴いてゐる

龜は鳴くと告げて歸りしちちとはは

(二〇〇一年三月)

花鳥諷詠といふから虚子は見えぬもの、聞えぬものは句にしないのかと思ふとさに非ずである。

亀鳴くや皆愚かなる村のもの

虚子

亀は鳴かぬものと決められてゐる。鳴くと半ば信じてゐるのは俳人ぐらいかも知れぬ。虚子の句の亀が鳴くと云つたのは村人で虚子は信じてないとも読める。が、亀鳴くやと言切つてゐることから虚子は鳴く派のはづだ。こんな話をしたら村人にそんな馬鹿など虚子は笑ひ飛ばされたのかもしれない。この

と思い、有り合わせの大きなビニールの袋とビニールの風呂敷を利用して、周りを確りと囲いました。翌日は、日差しのある間は囲いを取り除き、又夕方には囲うのを、五六日間ほ繰り返して、苗を枯らさない様にと落ち着かなかつた記憶があります。僅かですが収穫まで漕ぎ着けました。

算数を考へてゐる鉦叩

じょう

(二〇〇五年五月)

掲句、正統的には「算数を考へてをり」のように、中七字で切るべきでしょう。あるいはある結社では「考へてゐし」とするかもしれない。

ものの本によると、助動詞「き」の活用形「し」が中世以降言い切る形にも遣われるようになってくるのですが、通常での文章での使用に限られていた。散文以外のものの「し」の使用はなかつたらしいのです。現代の「し」の使い方は国語の先生からみれば滅茶苦

茶なのですが、学校文法を離れて「し」を終止形のうに遣うようになっての歴史の方が永い。

俳諧で過去の意をもたない「し」が、言い切る形で遣われるようになって現代に続くわけで、「算数を考へてぬし」と言い切つて、そして虫が鳴いていることだよ、と鑑賞して、現代なら通ずるわけです。それなら「考へてゐる」は何うなのか。実は「ゐる」も言い切る形なのですが、下にことばを続ける場合も「ゐる」を遣うわけで、誤解を与え易い形ではあるのです。それでも、「考へてをり」「鉦叩」の語尾、「イ」の音の重複を嫌つての「考へてゐる」なので、音のリズムを偏重したための「ゐる」なのでした。ですから、大概の俳句の先生はここで赤ペンを入れてくるか没にする。そして、こんな句を承知で採つてくれたのが飯田龍太でした。

吉宗のあびしいちやうももみぢかな 恭子

(二〇一四年二月)

本を選ぶようになった。小説上で覚えた江戸將軍の生い立ちとか、性格とか……。その中でも八代將軍吉宗は名君として小説に登場する。大岡忠相の解決した天一坊事件等小さい頃頭にはいった好きなものはなかなか逃げないようだ。我ながらやはり善人が好きだったようだ。池波正太郎の鬼平犯科帳に出てくる吉宗は違うようだが、それ以外は今だに悪人として登場する本は読んでいない。御三家の一つ紀州から来たので直系の將軍ではない。がゆえに話題は尽きないようで、小説の題材には事欠かない。

徳川家菩提寺の増上寺に吟行に行った時、胸が高鳴った。東京に居て初めて来たのだ。いろいろな場面が勝手に頭の中で蠢き出した。徳川家ではないが、寧々もここに来たことがあるのかな？ちよつと時代がずれているな。とか、俳句など何処かにいつてしまつて楽しい時間を過ごした。本当に綺麗な黄葉であつた。小学生の時母の浴衣をお姫様が着ていたお引きづりのように着て遊んだこともふと思ひ出

私の小さい頃は、我が家も貧しかったし日本も今のように物があふれていなかった。

疎開した福島の新潟の繁華街に店を構えた。親戚を頼つてのことだった。今はどうなっているのか想像もつかないが（東京へ戻つて来て六十年）、本屋さんがあつたのかさえも思い出せない。新潟の大畑小学校に入学したら通学路に貸本屋さんがあつた。ちよつと生意気に覗いて見た。知らない作家がいっぱいならんでいた。活字に興味があつたので、まず一冊かりてみることにした。

何に興味があつたのか今になってみると残念ながら思い出せない。山手樹一郎だったかもしれない、おぼろげながら頭に浮かんだ。時代小説作家だったので、それから江戸時代を舞台にした小説が面白くなつてしまつた。学校の帰りに借りて来て次の日返してすぐまた違う本を借りる、と。すぐ読み終えてしまうのでだんだんページ数の多い、小さな文字の

した。

銀杏黄葉を吉宗も仰ぎ見た事だろう。

紅葉川底の遅速は魚ならむ 恭子

(二〇一四年五月)

先日用ができたのを幸いに序では言え花見をした。桜は命が短いので一日遅れてしまふと葉桜を見るようになってしまふ。葉桜もなかなかものだが、五分咲きぐらいがいいのかなあ。なんて思ひながら椅子に座り二人で麦酒をのみながら周りの木々を見回した。三本しかない桜だったかなかなか見応えがあつた。一本は大木で、独立して立っていた。あとの二本は、まだわかぎであつたが素晴らしい枝ぶりであつた。その下で何組かの人達がまだ早いお花見の筈に坐っていた。結婚前の事吉祥寺の駅を下りて井の頭公園のなかを通つて帰宅した時のことを急に思ひ出した。ある時、桜の木の下で宴会を

ひらいていた一人が一升瓶を持ち上げふらふらと立ち上がって歩き出し、私に向けて瓶を高く持ち上げた途端に手から離れた。私は瓶が投げられたと今でも思っている。近くに交番があるので夜道でも心配はないのでこの時も安心してお巡りさんに挨拶をして帰宅した。

桜が散って水面に広がりさくらだけの表を見せているのはまことに美しい。もみぢもこれまた良いものだ。もみぢには桜にない重さがあり、水面に浮かび綺麗な色を愉しませてくれている。が紅葉した葉の一部は水底にとどまっている。流れにそって動く様はほんとうに魚のようだった。赤色が水泡によつて鈍く見えるのもまた一興だった。

蕎麦を刈る天に大きな影うごき じょう

(二〇〇七年一月)

私の住まう処は西に向いて日本海があり、その向

背に台地があります。名を「えんにやま」という。漢字では「家山」と書きますが、「いえやま」がやがて「えやま」「えんやま」、連声して「えんにやま」。その台地への登り口が我が在所の発祥地で、かつては寺が何ヶ寺かあつて、「御坊坂」という地名が残っています。あるいは、「によらい」、「やくし」の屋号をもつ家が現在でもあります。

そんな寺院群を招来するちからを持った権力者が当時あつて、その台地を吾がものとしていたに違いない。それで「家山」とその台地を呼んだ、と私は考えているのです。

私の子供の頃は、その「家山」は水田で、その周囲に畑、果樹園があつたのですが、いつの頃からか廃田となり、やがて蕎麦畑となっていました。

台地の奥には、我々が「大池」と呼ぶ用水池があり、今は鬱蒼とした森の中に一本の径がついているだけの、外からは池のあること想像もつかない姿になっているのです。

蕎麦は便利な作物で、どんな地味のところにも育ちますから、救荒植物ではなく常時の作物として植えられたものでしたが、昨年辺りからその蕎麦も「家山」で作る人がいなくなったのです。休耕した人に訊ねたら、「坂道をのぼるのがつらくって」ということでした。

点滴の夢安らなれ冬帽子 裕子

(二〇一四年二月)

平成25年10月3日卵巣癌の手術をし、ひと月後から抗癌剤治療が始まった。3回で1クルールの治療を6クルール、合計18回の治療だった。一回目の治療は入院して受けたが、二回目からは通院治療となった。抗癌剤投与で抵抗力の落ちた体。自宅での食事や体調管理は上手くいくのだろうか？不安だらけだった。一週間に一回のペースの通院が、主人の全面的な協力と支えの中で始まった。

点滴の前に血液を採取し白血球数と好中球の数値を調べる。基準値を下回ると点滴治療は受けられない。1クルールの第一回目は二種類の抗癌剤を投与するので、基準値も倍になりクリアするのがなかなか大変だった。二回三回目は一種類なので割とクリアできた。抗癌剤治療を重ねる毎に白血球数はぐんぐん減る。副作用で今まで食べられていた物が食べられなくなり、白血球数もなかなか回復しなくなる。1クルール終えるのがなかなか大変なことだった。体力的にも精神的にも辛い毎日だった。

通院治療は外来棟や入院棟とは別の腫瘍センターで受けた。新しく綺麗でゆったりとした設備の建物だった。初めて足を踏み入れた時、待合室の患者の数の多さに吃驚させられた。血液採取の後長く待たされて医師の診断、更に待たされてやっと治療室に呼ばれる。治療室に入り、そのベッドの数に吃驚！広い部屋に、カーテンに仕切られた立派なリクライニング式のソファベッド90台位が6列にずらっと

並んでいた。きれいな明るい雰囲気、ベッドにドキドキしながら横になる。最初に副作用防止の薬を30分点滴、次に生理食塩水を10分点滴しながら様子を見る。異常がなければ一時間かけて抗癌剤の点滴が始まる。体調をみながら点滴の速度を調整する。看護師が一人一人にその都度タイマーをかけていく。お昼にかかるので、ベッドの上で簡単にとれるお握りを食べる。カーテンを全部閉めている人はあまりいなかった。通路を挟んで向かいのベッドの人が見える。

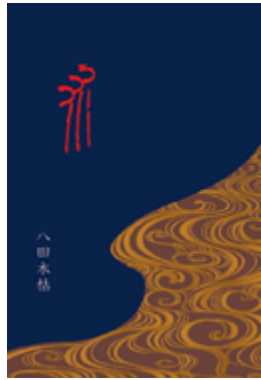
緊張しながら点滴を受けていると、向かいのベッドの女性が目に入った。もう何回も治療を受けている方なのだろう。気持ち良さそうな顔で眠っている。その顔を見ていたら、私も気持ちが悪そうに着いてきて緊張が少し和らいだ。薬の副作用で脱毛しているのだろう。毛糸の帽子をかぶっている。辛い思いもいっぱいしてきただろう。自分の事と重ねながら、せめて眠っている今見ている夢は安らかな夢であって欲

しい。そんな思いからこの句が生まれました。
「ありがとう」私は頭を深々下げた。

小春日の読む人を待つ伝言板 幸江

(二〇二二年十二月)

「小春日」なんて心地好い言葉なんだろう、伝言板なんて今はどこにも見なくなった。利用をする人達の人生が白チョークで、たった一行で判る私には伝言板を利用する、生き別れも恋もないけど駅前の待ち合わせは良くやった。待つ間伝言板を読み自分なりに答を空想した。そして哀しくその場を去る人待っていた恋人が来た人。「小春日」のような半日は電車に着くたび改札口に目をやるでしょう。伝言板に書こうか、白チョークが無いではないか、その時犬が私を指し走って来た。ゲージから出された松五郎が飛んで来る。後から保護してくれた人がやさしい笑顔で立っている。



3

水

八田木枯 この句集は『あを』創

刊十周年記念の句集。限定一部で二〇一〇年十一月発行。あを句会への投句を纏めた句集です。ゴシック句は『鏡騷』と同型句。また『鏡騷』と異形句は参考に載せました。

お十夜の闇の假面を脱ぎにけり
都どりかぞへてみたき数でとぶ

十夜粥ほうほうと吹きよよと吸ひ

道々の寂しさしらね冬の暮

東京タワー赤い毛布にくるみまし

鶏卵にまさるものなしクリスマス

血統のことなど言ふな竈猫

藪入やとべば雀は雀いろ

大寒の白紙のうへの文鎮よ

臘梅を折らばやとおもふ素老人

ふはふはとさんぐわつをはる草箒

あをぞらの蝕むまでに囀れる

地に下りて数ふやす鳩お中日

波に翹ぬらしとぶ鳥彼岸西

雲が雲よびこむ白水木かな
人は人よりかかり生き花は八重
眞紅とも違ふ四月の落日は
四月はや水輪ひろがる中に暮れ
山吹の黄のいまさらにくどすぎる
鏡中に映らぬものや夜の五月
であらう薔薇がしきりに散り敷くは
橘はわが家の紋や風五月
空中にきりぎしがあり薔薇垂らす
わがそばの空間ゆがめ梅雨揚羽

修辭學葡萄の青き種を吐く
揚羽過ぎゆきしか鏡乱れをり
全天を感じ葡萄を吸ひつくす
別れにはいつも月あり白縮
螢火のはづみやまずと塗枕
のうぜんの花に數あり箱枕
人妻となりて緑のサングラス
轟沈もかくやありなむかなかな
いつまでも生きてもおなじ法師蟬
浮袋月夜となりて凋みけり

少年と老人芒しりつくす
少年と老人芒をしりつくす
秋冷のしらじらとして身八ツ口
老獺の白い芒になりすます
黄表紙を時雨あかりに讀みたしや
時雨傘折り疊むとき一寸粹
人老いて臘八粥に顔ぬらす
水に落ち吹かるる木屑雨水かな
黄を厭ふごとく山吹咲きにけり
空あさくうす紅梅のいろ吹かれ
空あさくうす紅梅のいろうごく
切なさは鶯餅のかたちかな

戀猫のはたと鳴きやみ雨かしら
黒猫の戀もそぞろに寶仙寺
ゆく春の隠坊草履干されあり
隠花植物月のひかりに蝕みぬ
逝く四月水は水邊をいたはりぬ
朕思ふに田螺はたしかに鳴きたるか
隠遁の目刺を焼けばすぐに焦げ
鰯の酢は嫌ひどつせと老妓言ひ
旅にゐてあらまほしきは京うちは
夜店の灯ゆらす昭和がひそみゐて

天日にとどめさされし蝶蜋かな
天皇がしろしめす國さくらんば
むさし野の夕日饅えたる獨歩の忌
蠅帳にとまりし蠅のやはらかき
裕次郎忌ハンカチいさぎよく振らん
松風は松より発す夏越かな
屋根裏に頭ぶつかる夏休
プール出る老体水をひきずりぬ
ひたに夏戦後生まれもすでに古い
盆の闇立錐の餘地なかりけり

かの夏のつづきの夏や臍を噬む
裏おもてなくて蒟蒻秋の風
秋風に裏のありけり墨を磨る
放生のどれがどれやら生ま鰻
放生の鯰に觸れて髭に觸れず
秋朝や家事家慈加持嘉事微塵切
風落ちて水にひろぐる九月かな
九月盡雨落ちてきて水となる
水澄んて鷺はあたりを白めとぶ
ブルゾンも二重瞼も霧しづく

鳥たちは翅もてさばく紅葉かな
七五三日和雲見て水を見て
小春かな四谷坂町猫どころ
水洩をすすりあぐねし戦中派
大寒やわが存在の皮つまむ
目をあけしままなり春のしだらでん
革ジャンの匂ひ革命前夜とも
囀つて十萬億土までゆくか
鶯もちいろを掴みて食べにけり
ほんのりと身八つ口あり匂ひ鳥

ごたぶんにもれずに梅の枝垂れけり
さんぐわつのこぼれやすきは雪花菜かな
ひたに哭く寢釋迦のためと言ひながら
浮名とは流すものなり單足袋
人は古い青水無月にほろ酔す
人生暮春一行詩亦然らずんば
水洩をすすり故郷を捨てました
藝に身を立てて春眠むさぼりぬ
恰是どちやういんげん名にし負ふ
質草になるもならぬも陶枕は

窓あけて向うの窓も薄暑なる
 庖厨の隅に陣どる蜷酒
 紫陽花忌夕日こまかにちぎりたる
 三伏の貝を煮つめるくろずむまで
 毒消しやあいらんかねと素通りす
 ふるさとの月ふるびなそフランネル
 人を戀ひ人に戀はるる黄帷子かな



をはり

限定一部と云ふ句会の句を集めた『水』を三回にわたりご紹介した。句会の句をこのやうに公にされるのは不本意かとも思ふが御寛恕あれ。句会の句と申しても完成度は高い。『鏡騷』と比しても変更はわずかであることから伺はれる。

これらの句を句会で採ったり採らなかつたり、また勝手なことを云つても木枯さんは静かに聞いていただいた。酒の出る句会なのでお元気な時は一升瓶を脇に立てて「酒奉行だ」と冗談を云つてをられた。今は帰らぬ懐かしい想ひ出である。だがこれらの句を読むと、木枯さんがふうつと現れる。まだまだ木枯さんは現役である。

大路の巻

平成二十六年師走十八日〜平成二十七年弥生四日

捌 井上石動

1	手を添へて大路行きけり霜の朝	石動	19	鳥曇企業秘密と言ひ逃る	椿
2	五差路の町へ降れる冬の日	草	20	さて二合半と急くか馴染へ	音
3	リモコンの電池切れとは思はずに	くら	21	恋にならぬつきあひもよし奈良の旅	波
4	コンビニ主人むかし家具屋で	竹洗	22	無限の刻のおなじ迷ひ子	草
5	名月を見よとの葉書庭へ出る	波	23	この星に殺戮をせる兵等ゐて	と
6	柿実るまま戸の開かぬ家	と	24	車手裏剣千代紙で折る	椿
7	爪の色変へてみようか吾亦紅	椿	25	吹きあがる関東ローム渦を成し	音
8	マナーモードを今日は外して	音	26	じゅごんゆつたり寝返りを打つ	くら
9	待つ人へ空港の灯の濃くなりぬ	竹洗	27	屋敷神あれもこれも重さかな	草
10	スカイツリーの見ゆる一室	くら	28	意識調査の留守電を消す	椿
11	捨てること決めて写夏を閉ぢる午後	と	29	この町にあの村に月一つ泛く	竹洗
12	ほそき煙の浅間行くらん	椿	30	栗鼠はせつせと胡桃溜めこむ	波
13	夏の月審の河原の白々と	くら	31	積ん読の白雄坊撰秋団扇	くら
14	蠅の足蹴をくらふ暇	音	32	外つ国へ立つ人を見送る	草
15	ふたりして老老介護またたのし	竹洗	33	天人もわたしも五衰雲の湧き	波
16	江の島の波小さく大きく	波	34	相思鳥らは森の歌ひ手	と
17	太幹の花ひらき初む同窓会	草	35	花筏仄とたゆとう井の頭	音
18	長閑なる日や猫とパンチを	と	36	乗つ込み鮎に眼こすりぬ	竹洗

夕焼雲

山莊慶子

野菜畠ぬけて彼方へ梅雨の蝶

台風禍レイテの子等の笑顔かな

祭鱧京へ送りし島の意気

意のままに家具置き換へし日輪草

籐椅子に坐りて思ふ祖父のこと

ターナーの絵かと思へり夕焼雲

簾越し猫の目ありし夜明けかな

あとがき

連句は人の輪を作る俳人にとっては格好の舞台。いつもは一人こつこつと句作をしてゐる。個人作業である。今月掲載の連句は多数の参加者が井上石動さんの捌きで巻上げた貴重な巻である。貴重な宝物が又一つ「あを」に加わった。石動さんには顔も気心も知らぬ人々の句を捌かれ陰のご苦労があったことと思ふ。しかし懇切なみちびきにより無事満尾、挙句がいまいちおほらかさに欠けたのが心残り。

(喜孝)



原稿募集

○ 自作品の下は三百字前後の短文をお願いします。肩肘はらぬ日記の続きのやうなもので構ひません。

○ 「俳境流連」は、自句を導入部品として随筆を書いて下さい。長さは自由です。

○ 特別作品 投稿者が少ないのが残念です。皆さんのページを開けて待ってます。句数十句以上。

二〇一五年四月号

発行日 四月十三日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090 9828 4244
ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・テイリ エイマ
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130・6・55526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。